

広報委員会（第25期第3回）、「学術の動向」編集分科会（同第2回）、
国内外情報発信強化分科会（同第2回）合同会議
議 事 要 旨

1. 日 時 令和3年4月23日（金）10:00～12:00

2. 場 所 日本学術会議大会議室

3. 出席者

【広報委員会】

菱田委員長、狩野幹事、所幹事、（以下ビデオ出席）松下副委員長、磯委員、大倉委員、多久和委員、伊藤委員、隠岐委員、辻委員、三成委員、渡辺委員

【「学術の動向」編集分科会】

所委員長、狩野委員、（以下ビデオ出席）高山副委員長、岩井委員、大倉委員、井野瀬委員、伊藤委員、川口委員、辻委員

【国内外情報発信強化分科会】

狩野委員長、神田委員、三枝委員、日比谷委員、（以下ビデオ出席）岸村副委員長、北川委員

※下線の出席者は兼任のため重複

4. 配布資料

資料1 日本学術会議のより良い役割発揮に向けて

資料2 第182回総会資料3「日本学術会議活動状況報告」（菱田副会長報告 広報・情報部分抜粋版）

資料3-1 国際委員会国際対応戦略立案分科会における加盟国際学術団体の広報に関するご要望（中間報告）

資料3-2 行政改革推進会議による指摘（通告）（令和2年12月9日）

5. 議 事

菱田委員長より各資料について説明がされ、その後各委員からの意見を聴取・意見交換を行った。

（主な意見）

○学術会議の情報発信力強化（全体）について

- ・報告書に記載している内容はすべて行うべきだが、戦略的に優先順位をつける必要がある。
- ・学術会議自身による広報活動だけでなく、別の所で取り上げてもらうための仕組み作りが重要。
- ・学者はあまり広報が得意ではないので、検討に当たっては広報の専門家の力を借りる必要がある。
- ・社会的に大きな話題が出た際に、学術会議として学術的な観点からコメントをすることが重要。
- ・マスコミと専門家をつなぐ役割を学術会議が担えるとよい。
- ・学術会議からの広報の際には、文章だけでなく、図を使えば論点がわかりやすい。

- ・SDGsについて教育していく必要があるのに教材がないとの問題がある。これらは一般の方が受け入れられやすいテーマであるので、他機関とコラボしやすい。
- ・連携会員を広報活動に使って、彼らを通じて所属している機関の方々に学会誌を広報していくことが重要。

○学術フォーラム・公開シンポジウム関係について

- ・オンラインでシンポジウムを開催すると全国や海外からも参加できるが、一般の人にも聞いていることを意識するべき。
- ・シンポジウムの内容について、一般向けに二次情報としてわかりやすいこと言葉で情報発信する必要がある。

○提言関係について

- ・現在、SDGsの関係ではマッピングされているが、それ以外の軸でもマッピングできると良い。
- ・学者向けの文章になっているため、一般向けのわかりやすい要旨があるとよい。

○ホームページ関係について

- ・学会誌の会員がどんな人であるかが伝わるような工夫ができるとよい。
- ・委員会の議事録を作成してもホームページが更新に時間がかかるとの指摘がある。ホームページについては、今後改良すべき作業とは別に、従来の定常的な仕事があるがそれも重要である。
- ・海外のアカデミーのホームページも参考にしつつ、国民が関心を持つトピックをわかりやすいところに掲載することが必要。
- ・新たに政府が企画しているものとリンクするような形でホームページを作っていくというのも一つやりやすい方向性

○海外への情報発信について

- ・英語での情報発信についても、日本語の公表と同時に発信できるようなスピード感が必要。
- ・必ずしもすべての内容を英語化する必要はなく、海外に発信すべき内容と、ローカルで十分なことを分ける必要がある。

○「学術の動向」関係

- ・今の冊子体としての質を保証しつつウェブと役割をうまく連携し、より双方向的にしていく必要がある。
- ・「学術の動向」自体の広報が必要。良い記事を掲載しても読まれなければ意味がない。
- ・内容を一般向けにするのではなく、あくまでも学術界の中での異分野が交流するようなメディアとしての機能に徹すればよいと思う。
- ・一般向けに二次情報として解説を纏めるなど、対象とする読者をはっきりさせるべき。